

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 渋谷 裕紀
学位 博士(文学)
学位記番号 新大院博(文)第48号
学位授与の日付 平成26年3月24日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
博士論文名 有明詩におけるバラッドとソネット

論文審査委員 主査 教授 高木 裕
副査 准教授 堀 竜一
副査 准教授 廣部 俊也

博士論文の要旨

論文の構成

序

第一章 有明詩のバラッド試行

- 一 韻律の問題、典拠と詩の世界の関係、バラッドの特徴
- 二 日と水の一体化という不可能な希求と登場人物の齟齬
- 三 重ねあわされた世界
- 四 「人魚の海」における「幻の界」

第二章 有明の「幻の界」

- 一 『有明集』当時の詩論、『早稲田文学』陣営を中心に
- 二 『春鳥集』自序に見られる有明の世界観
- 三 口語自由詩か文語定型詩か
- 四 「秋のころ」における幻 「清げの尼」の回想
- 五 「滅の香」における「幻の界」

第三章 ソネット「豹の血 小曲八篇」

- 一 提示部「智慧の相者は我を見て」「若葉のかげ」
- 二 「霊の日の蝕」「月しろ」「虫の露」
- 三 山場の部「茉莉花」
- 四 結びの部「寂静」「昼のおもひ」

結

第一章では、日本の近代詩史上、独自の象徴詩の世界を確立した蒲原有明のバラッドを取り上げ、特に詩中に複数の人物を登場させ、詩の世界が重層的、劇的な展開を有することに着目した。より

具体的には、バラッドにおいて、有明が「幻の界」と「まさめ」の両世界を描こうとしたこと、現実的、合理的、理智的な立場にある「まさめ」の価値基準では掬い取れない価値が「幻の界」にあると考えていたことを明らかにした。

第二章では、有明の描こうとした「幻の界」が当時の詩壇には容易に理解され得なかったこと、特に明治30年代の文学界で強い勢力を持っていた『早稲田文学』陣営からは晦渋、高踏的という理由で厳しく批判されたことに注目し、『春鳥集』自序を手掛かりとして、有明独自の象徴観、詩の理念を解明しようとした。その上で、口語自由詩を奨励する『早稲田文学』の写実観と容易に概念化し得ない詩の奥義の究明を志していた有明との間には根本的な差異があると説いた。

第三章では、『有明集』に収録されている、「豹の血 小曲八篇」の総題の下にまとめられているソネット群を取り上げ、その編集・構成意識について検討、考察を行っている。具体的には「智慧の相者は我を見て」～「昼のおもひ」に至る八篇の詩に対して丹念で詳細にわたる注釈を施し、「豹の血 小曲八篇」が「提示部」、「展開部」、「山場の部」、「結びの部」の四部から構成されていると結論づけた。

審査結果の要旨

渋谷氏が本論文にて検討、考察の対象とした蒲原有明は、日本近代詩史上、島崎藤村が『落梅集』を刊行すると同時に新体詩の表現に限界を感じ、小説家へと転向していった後の明治30年代後半期において、藤村、ダンテ・ガブリエル・ロセッティ、上田敏の影響を受け、独自の象徴詩の世界を確立していった詩人として位置づけられている。ただし、その古語を頻用した修辞、措辞のせいもあって、難解、晦渋との誹りは免れ得ず、同時代の詩壇では厳しい批判の対象となった。

本論文は、こういう有明の象徴詩群に内在し、いまだ解明が困難とされている多くの疑問や謎に果敢に挑もうとした意欲作である。氏は、第一章、第二章において、前期課程在籍時より、地道に有明詩の注釈に従事してきたことを踏まえ、有明の多くのソネットの陰に隠れ、これまで比較的等閑に付されてきたバラッドに着目し、『独弦哀歌』の二編「佐太大神」「新鶯曲」、『春鳥集』所収の「姫が曲」、『有明集』所収の「人魚の海」を具体例にとり、バラッドとしての形式と音韻構造の効果を確認した上で、詩中に登場している複数の人物の語りの観点の相違から生じる重層的な世界を剔出し、それぞれ人物に象徴される世界観、認識のあり方を浮き彫りしようと試みている。その結果、詩人は、バラッド形式を駆使することで、相異なる世界観、価値観、認識の視点を有する人物同士の対立、抗争、葛藤等を劇的に描こうとしたのではないかと結論を得た。さらには、これらが「幻の界」と「まさめ」とからなる有明詩の根本を形成する二重の世界の対立という大きな特徴となっており、これが生活実感を重視する当時の詩壇への有明流の返答とみることができるとしている。この指摘については、佐藤伸宏『日本近代象徴詩の研究』を踏まえつつも、氏独自の卓見を認めることができる。

また、第三章では、『有明集』所収の「豹の血 小曲八篇」の総題でまとめられたソネット八篇を取り上げ、この八編すべてにテキスト分析を施し、詩の主体の内部における「幻の界」を懐疑的に見直そうという境地に達しているとし、これらが詩人有明の自己の詩作への省察を主動機とした詩篇であると考え、自己批評性が強く反映した詩篇ではないかと説いた。さらに、丹念で詳細にわたる注釈を施した上で、八篇のソネット群が四部構成（提示部、展開部、山場の部、結びの部）に

なっているのではないかと論じ、その構造的特徴を浮き彫りにした。以上のうち、特に有明詩に内在する自己批評性を明らかにし得た点については、従来の有明研究では全く論及されてこなかっただけに、本論文における新たな知見として高く評価することができる。

本論文は、有明の詩法、韻律、古語の多用等の修辞の意図、狙い、効果についての考察を行っているものの十分とは言えず、さらに島崎藤村、上田敏、ロセッティやフランス象徴詩の影響についての論及にも物足りないものがある。

しかしながら、渋谷氏がいまだ先行研究で解明されていなかった有明のバラッドに内在する疑問、謎の一端を解明し得たこと、具体的には彼のバラッドが小説的、劇的な展開を企図した長編詩であること、また、従来等閑にされてきたソネット集「豹の血 小曲八篇」について、すぐれて自己批評性をモチーフとした詩群であると指摘した点は独創的であり、高く評価できると判断した。

本審査委員会は、本論文の研究分野、対象、内容からして、博士（文学）の学位がふさわしいと判断するとともに、本論文は博士（文学）の学位を授与するに値する水準に達していると全員一致で判定した。